文古物語　乙

ル 4
1543
5

1543
5

洛陽名所集巻之五目録

泉涌寺　萬寿寺　墨染寺　山科　粟田山　木幡
新熊野　稲荷　宝塔寺　安祥寺　青蓮院　小栗栖
清閑寺　藤杜　醍醐　花山　伏見　櫃川橋
東福寺　深草　笠取山　御廟野　御香宮

泉涌寺

泉涌寺

○此寺ハ東福寺のひがしのかたにあり
むかし左大臣緒嗣公の建営にしてはじめ
法輪寺と名づけしのちに仙遊とかはりしため僧務
まうし泉涌とかけらる建保六年和州刺史
従五位下信房俊芿にうけしかば廃頽し
たるを後鳥羽帝に奏し再造をとげ官寺
となしけるとぞそれよりのちは帝
王の陵所となり代々のみかどを清僧
おほかりし

俊芿字ハ不可棄肥後乃飽田郡の人也。七歳よ
て佛法にしたしんじ。九歳にして州の味
木郡の吏德憑善子にしたしみつきて自然と
いふ十歳のとく妙法華経よみて六日にしてとげ。
十四の時飯田乃真俊にしたがひ。顕密の教をと
まなびぬ。十八のとく落髪して十九のとく大宰府
乃観世音寺にあゆみて具戒をうけ。建久九年
に。渡宋をこゝろざし百日乃不眠をとら
精進し。此の十年四月に商船にのりて浮海
し。五月乃はじめ。江陰軍にいたる。径山の
かつも蒙庵聰禅師にまみえん。此をへて景福る

如庵了宏律師にあひて律部をならひ。持犯
開遮ともにとげね。建暦元年のころ帰朝
あり。宋地にあること十三年也。そのとき
はこびきたる書籍すくなからずして。儒佛の
書凡二千百三十巻。碑搨数千種也。ひろまりしとぞ。
貞應二年十月に。肥州の刺史平景連。をすゝめて
郷里にありし時。武州の刺史平泰時をすゝめ
あまたに菩薩戒を受ぬ。嘉禄元年十月泉涌寺
におゐて。重閣講堂にて戒をさづく。台密二宗
ともに兼備ならし。中興とせらる。後鳥羽帝
賀陽宮にして。菩薩戒をうけたまひてのち。灌遷

帝まで菩薩戒をさづけ奉る。はじめ肥州の官吏(くわんり)秦氏(はたうぢ)にとつぎて十九のとし病臥(びやうぐわ)しけれども医巫(いぶ)もかなはずしてまさにうせんとす。時はや遂死(かつし)におよびけり。父母なげくことかぎりなし。さるほどに彼の奇妙(みやうに)なる紀にはじめのとけるところ辞してはなかへりきし。密法(みつほう)を課誦(くわじゆ)しいのちをたもちけれバ。蘇息(そそく)しけり。宋(そう)地のくにもこのごとくされ異妙(めう)行(ぎやう)あり。初(てう)め我邦筒獄(けうごく)に棲遅(せいち)し。一伽藍(がらん)いたく。正法寺(しやうほうじ)と号(がう)しめ那(しや)仏像の自(てう)。木像(もくざう)を彫(えい)りつくし。宿(きやうぞう)を新にたてしまつし。安貞(あんてい)元年三月八日に寂(じやく)せり。

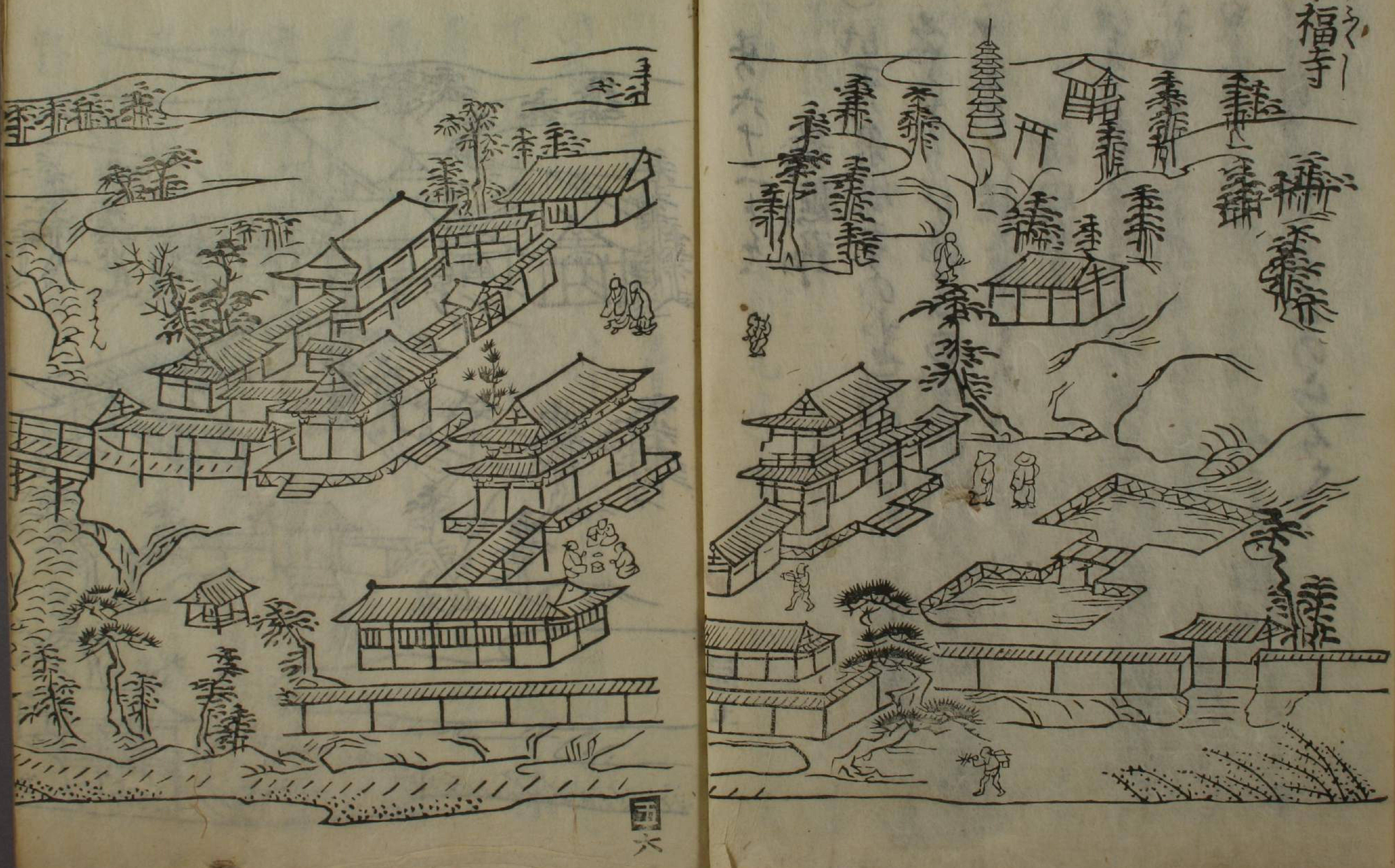
其六十二とぞ

新熊野(いまくまの)

○此所ハ泉涌寺の北也。紀州熊野の三所権現をうつしまつる。本地十一面観音(くわんおん)。弘法(こうほう)の作仏(さくぶつ)。今洛陽(らくやう)三十三所乃観音のそのひとつ也

清閑寺(せいかん)

○此寺ハ新熊野の辺(あたり)。佐伯(さいき)公行(きんゆき)建立(こんりう)せる宅(たく)舎院(しやゐん)のみぎりなり。又小督局(こがうのつぼね)すまひて後すまひしと云伝へり。むかしより世に清閑寺となづけて延喜(えんぎ)よりてまやしけるハ此ならの山のふもとなり


東福寺（とうふくじ）
つうてん

東福寺　恵日山

○此寺ハ大佛より八町南也。開山聖一國師十境と
て　䆠雲閣　選佛場　潮音堂　栴檀林
思遠池　成就宮　通天橋　千松林
取露井　洗玉硐　是なり
釈辨圓。字ハ圓尓。姓ハ平氏。駿州藁科の人なり。
母の夢に、ひかりをのむと見て乃ち生る。十五の年。止観の
講席にまじはりしに。故四諦外別立法性と云句に
て。講師滞儀して。時に尓。解釈をのぶ。十六すく。
三大部残りなく。十八の年。園城にて落髪し。
野州の長楽寺にいたり栄朝にしたがひ。別傳

東道はとひらきぬ。釈圓栄朝に。密印を
うけ。相州寿福寺にいたり行勇に礼し。す
んとして。院従子首楞厳乃雑問を加へ。学兼識
易を弘めひ。宋地に入らん事を弥がたくして。嘉
禎元年に。明州の界にいたりまり。景福律院
に寓し。天童山痴絶沖に礼し。天竺寺の月
栖庭台宗相承乃図をさづかる。霊隠の楞厳
楞伽。円覚。金剛。四経疏并にそうけり。
浄慈の笑翁堪。霊隠乃石田薫に法来し。寧
退耕に遇。無準範の明宗なるをきこ。径山に
のぼりまみえしに。佛鑑そのまゝに。契許

し。旨にわたりけるしして。會中乃大衆龍魁たり
なりしかば。淳祐元年四月に。辭。密庵師従の法
衣并に自賛の頂相をさづけたまへり。同七月
四明を發し。同秋に博多につき。崇福。承天
乃両寺にあつまれり。時に其の門子。湛慧大和
國藤原道家にかうむりし。相国信をとたく。
ゆゑに京師にむかへ。光明峯寺乃別墅にて禅
戒。秘密の灌頂をうけしたまへり。正嘉元
年。後嵯峨帝。禅門乃菩薩戒をうけ給ひ。
黄金を翁と衣におくりて賜はるとぞ。建治
元年。亀山帝。ふたゝび宮中にめして。教の微旨

ひきしけり。此年。深草帝菩薩戒をうけ
たまひぬ。又堀河通太師に教乃大旨を問給ふ
けるに。三教要略といふを述呈しけるとぞ
しめさる。かくの如の悟しおはしけるごとく
なかるべきにおもむきしが。さて大相国大伽藍
を城東にたてく。洪基を東大にならべ盛業
を興福にならべ。東福寺となづけられけり。
俗に。新大仏といへるとぞ。いまだ成就せさる
うちに。禅を室に帰依し。禅刹となし給ふ。
洪営けんかなるもおとろへけるゆゑ。善
門寺院たくみにとおもしめ。建長七年に。

東福開堂しけるにや。正嘉元年に平副師に
と相国にまみえ。皇子征夷大将軍にむかへて
法の遠仁を頌じ。そのゝち。徳化のおほせる事
しばしおはしめる。弘安三年の春。微疾にかゝり。
常楽庵にうつる。十月朔日。法鼓を鳴し
衆を庵に集めいひける御侍は十五日なり
まかせ寺。法堂。寶華主座のまへにかへり。平常
句を説。涅槃に入むとて。十四日の
晩かたにいのちをおもけりしに。後頭第一人
居くりす六日よりてより。侍僧にあいし。廟宇
灑掃せよ。晩かたにこれをきかんとやすき

して。越後乃無傳まうされぬ。尓。桐見んとよりつく
おもむきてに遊しぬ。遺偈曰。利生方便七十九年
鑿知端的仏祖不傳正和のとしみ謚を國師
わくたまふ。元亨釈書に委書せり
世にもてはやされし。元亨釈書三十巻済北集七
巻三聚韻なども。此寺乃うち海蔵院の僧虎関
乃作なり。虎関釈書は撰しくわり表を云。元
亨二年八月十六日に後醍醐帝にたてまつり。
宏覚慧才乃かきまつらせしに。そのゝち貞治
年中に。大蔵経の印板とともに此寺にありて。今に
世にもてなされる。支世法堂仏殿なりし。虎関再興

萬寿寺

○此寺は東福寺乃北の門を入て左乃かたに一ま
へある寺なり。むかしは六条坊門にありしとなり
聖一國師乃弟子宝覚禅師の開基にして。京城
山とよぶ。五山乃そのひとつせり。此寺の十境は
十地超閣　大雄宝殿　三山神廟　千松密径
枯木田春　新花更雨　東軒　南院　琴臺
鏡沼　これなり

稲荷

稲荷

○此社は東福寺より八町南也
和銅年中にその神をはじめていなりと云
はじまり給ふとかや也
或説に空海東寺の門前にて稲をになへる
翁にあひ給ひて其のまゝあがめ鎮守とし
なさしめてぞいねをになへるよしにて稲荷
と号すとぞ申ける
李部王記に延長年中に稲荷の神貞崇
法師に告げられしは大般若を読誦せば災
難はのぞかんとなり

上中下の三社　上社 客人 十禅師　中社 大宮 四大神
下社 大宮 命婦 田中　延喜八年にはしめて建立
ありしとや
稲荷の神乃立のに。我たのむ人の願ひを
てらしたまふう来世におほふけの灯
親のまもりなせゆへなく人におしへらるゝまけ
ふるきどものまことより起んごいなりまうことす
て祈りまゐる。法師乃着に社の内よりいぬ
いづしあん徳立のに　永なる世まもるてまし
なてゝとゆへのしたりにすげくんのされ
やどりましおれしへ祈ひまうとや

藤杜

○此杜は。深草乃里洛陽より巽や。崇道
盡敬天皇の廟とそ
元正天皇養老四年四月一品舎人親王勅を
けたまはり。日本紀三十巻系圖一巻をたてまつ
まつらるとかく○天平宝字三年六月舎人
親王を追てし崇道盡敬皇帝とおくりなし
當麻夫人を大夫人と称しおはすとや　廢帝
は親王の子當麻夫人は
親王の妃なり

深草

○此所ハ京より二里ばかりたつミにあたれり
仁明天皇嘉祥三年三月廿一日に崩し給ひ同廿五日
に此所に葬り奉りしゆへ。むかしより仁明を深
草天王と号し奉る。此時文屋康秀三河になりて
ひさご殿乃谷まうけくし照日の着しきふすやれ
あかぬどもろし。古今集に見えたり。定家卿の歌に。
うづらなく夕ぐれの秋風身にしみてうづらなくなり
深草乃里。定家卿の思ひ入身ハ深草の
秋の露たのめしまやこゝろしの風。雅経卿ハ。
みのくさや苦しき色に消ゆくしの里にて

哀げなり。ものゝみしんのかくれもあさう
らど。おもかげ夏の鶉衣乃うちとく招うかう
なるゝを。けだおもしろき句の籠中鶉しら
くもしほきをわれしバなり

○墨染寺　日蓮宗なり。そのかみの庭に墨染
乃桜とくる。古今集に。○ふかくさの野
への桜し心あらバ今年ばかりハすみぞめに
さけとよミしもこれなり

○宝塔寺　日蓮宗也。むかし日蓮衣のまゝ
えけしれし本尊給ふしえらもとこ

醍醐

醍醐

○此所ハ洛城より三里ばかり南也。上下の
二にわかる。其間五十町あまりばかりなるまで
まことの山趣ありといひ侍りぬ。むかし
より。賞吟ふかく人々のなのあおほの跡

釈聖宝ハ。光仁帝の後にして。讃州の人なり。
十六歳にして。真雅法師について得度し。三論
元興寺願暁 圓宗唯識 東大寺平仁 華厳東大寺玄栄を学び。
又金剛峯寺の真然に謁して。密教をうけ
源仁にまなびて。ことごとく奥秘をきはめたまへ。

其のち興福寺の維摩講に請ぜられて、
竪聖義。二空比量義をたくみにのべ給ひ
め東大寺の東坊に怪鬼の出るとて衆
ゝおそれて住ものなかりしに。宝ゆきてすみ
給ふに彼鬼のかたちをかへておどしけれど。
けんなりけるを少しもおそれず。仏力によつて
其のちはふたゝびあやしきわざもなかりき。一
又宝ある時山にわけ入けるに。梁洞
より大蛇うかゞひおそれて錫杖にてうち
給ひしかば。宝をおそれてひきさりにけり
しかも又庵上に一の巌石をぞ宝、金峯山

より負来りてそのくに人力のあたはざる
く及べきにあらずとや。宝をもとより
險津をこのみ。名山大川をめぐりまし。
金峯山にはじめてみちをひらき葛藤をはらひ
らひ給ひて道をひらき給ふ。いまにも其行
作しる。貞観のはじめ。醍醐寺を開
顕密の二教をのべ。南都東南院をたて。
三論宗をひろめ。一丈六尺の大像二千余
体をつくり。悲済のわざをほどこし。衛役を金
峯山にいたりて。淀河に橋をわたし。宇野に
りにもたえせぬ人の心を。仁和三年勅に

て。傳法阿闍梨となりけり。寛平二年より貞
観寺乃座主になられけり。延喜のはじめより権
僧正になられけり。のちに。僧正となり。同九年に
醍醐をたもちけり。観賢にゆづりて。同夏に病
普明寺にて。病まひしたまふるを太上皇
幸向しおはしく。同七年七月に。逝しぬ。
年七十八とぞ。又室。所持の如意あつまり。誂(?)
五師子が持しざし。西に三鈷杵をとり。頭衣
とくにまするべきことを表しけるや。宝没し
て代々より。傳授し。東大寺の東南院より
さめぬ。興福寺維摩講師つとむるときの如意

なるより。演暢に。應じたるとぞ。あまる。論
義のおりは。東大寺のまへ。その如意をいだきて
して。講会をとりたちしたまへやそのしるし。
朝廷。東大寺より宣じて如意をかへさしめ
られしとぞ。識に。秘重のわざや
釈延殷。姓は橘氏。但州乃人なり。十六のとし。
台嶺にのぼりて。慈仁により受戒し。静照に
したがひて。山家の法をまなび。長保二年に
寂照とともに。入唐しけるが。朝廷より殷を
ばかりて。其の偉器なるをしりたまひてや。後又
景雲乃こゑをきく。皇慶ととかれしより両部の

密法ひらけ。寛仁乃ころ多武峯にこもれ
おもむきはじめて。此学をきはめつゝ。つゐにしやう居
住する所。明快法師きこしめし。数年ののち本山に
かへりぬ。又大恩山より入覚寺にゆく。房をひらき
うしほとめるもの中納言顕基。般若心経をよみ。栄
えたりし源氏のうち。勧修寺の楞厳院に草座し
けるもの。長暦二年春。慈覚智證の両徳
座主位をつがしめんとせしを。殿下のくはひ
て。醍醐寺にうつしまいらせたりとかや

笠取山

○此山ハ醍醐のたかきひがしにあり
匡房卿のにて。うちのはしく笠取山乃しぐれにも
ハ紅葉ぞぬれつゝ人めとゞめて。元方が雨ふれば
露をわけし我笠取乃山をいく〳〵の紅葉
めけん。又醍醐卿のに。雨ふる夜ハ笠とりの
山白妙の花さへいたゞくなるらん
ようしたまふも

山科

○此所ハ都よりハ東南
後拾遺に。和泉式部のに。くるまをたてゝなきよりの

みよかくれのさとにしあらくも山科本堂
又藤原隆信朝臣。春のはじめ山科わたりをとほり
きけるに。梅花ちりなる宿のみえしかれば
主ぬ阿世侍るかと。おもしたるくいひやりければ
いひいだし侍りける三のよ　梅が香ハ主ある
ぬしかる名もしらず風情あり忘らし。とや思はぬ。
ゆよめるも此ちらぬるを　見なれたる
りも宿るも梅がにほひそめきて
いでいとも嬉しくよのこゝろも侍りしとて
天智天皇の御陵おはしますといふや。後山階にて
醍醐天皇。醍醐寺の曼陀羅堂の辰巳なる

安祥寺

○此寺ハ山科北嶺にわたりて入る事なる本尊ハ観音也
釈恵運ハ。東寺実慧の門生なり。承和の
すゑに。円仁と倶ひ。渡唐し十四年にかへり
祥寺にもとり住り。貞観十二年九月に寂
をとりけり。年七十四とぞ
讃岐守なる藤公輔はじめ法名をとく。慧覚
門主なりて。後俗にかへりて世にふる大まとに
けりしに。都のうち煙ともおもかりけ
ればて大史に勅しとハしめて。東南の方
僧都ざう仏のかゞしゆへなるとも奏し

なりば公輔に詔ありて。此安祥寺の供養を請
理ぜしむ。公輔寺に入ぬるに。白杖もちたる老
僧きたりて。東の方へ行けるをみれば。
はるかにしたがひゆきけるに。やまのうちにいりぬ
文徳帝乃女御宗子が世のつねの御
事にあつまりける所。治済乃晦日によしある人々
きけ給ふもの枝にれにまして堂おほえたる
あれば山をはじめてうつりて出けるやうに見えたる
字多業平朝臣　山のかげはるかなる
にありけるありけるのりの道と同じかるべし

○花山

此山は山科のへんや里なり
僧正遍昭のすみし寺なり。色をこのみる
なにはかけは超しとやく宿りしらべく
とよろしきへの花山にまうでてさて夕
さりはかへるさりへのよしなかりける時よりぞ
さすれはなからしけるなかりけり。
又津守国基。花山にてよめる
僧正遍昭が跡の桜ちりけるを見
てよめりけり紀貫之にかはりて桜花衣
昔かんしやつくしまへよむこと也。
鳴やなけ山郭公といひ。定家卿は雪の

冬ハ雪のふるとし。殊さら京ぢかし。おもしろき
めづらしかりけり

○御廟野

此所ハ山科の内也。天智天皇御陵の跡
御廟あり。ハ野中にあり。往来の人まゐるかならず
まゐり拝すなり。昔ハ鏡の里といひし
所なり。ならぬ所なれバむかしハ人まれなりしが
今ハ山より都へのぼる道也
後の第一なり。昔此帝崩じ給ひて山科の
里より葬送したてまつりし所ハ此辺なりと
御廟所ハいづくともしる人なし。たゞ皆のおもふ
まゝにいひつたへけりとかや

宴ゆく給ひし所也。天智天皇ハ舒明天皇の太子。十二月
乙丑の朔日に近江の宮にて崩じ給ひ申しき。
九月播磨乃太守松平式部大輔忠次鉛石在京の時
三条新より大津よりくだりし時九月十三夜の
月の詩など作られけるよし
帝陵成廣野猶凜冽秋風鴉翼異高松上蟬声盛卑中音
年過管客今日見牧童堪歎旅程暮就帯五柵宮

○粟田山

此所は日野寄といふ。古今集にのせられたる
よそめにもそのしるしありとこのそりしとか

○青蓮院　粟田口乃うち

伏見
もゝ山
ごかうの宮
ぶんごばし

伏見

○此所ハ深草の南鳥羽乃東北より藤や
平秀吉関白此所にて廣城きづき給ひて
そのころハいとおびたゞしくうつりのあへさかん
今ハ只そのやしきばかり家居するぞ。も
ものゝまへくやけてうり見へし御香
道志ぬこがそ、のきまえて。鮮草もげ
こぬすゑもまこるぞれよりいだくなる
ばみ渡ひろう狩のしかまのしうちは行みに。
ちんざて西乃るゝ國へのふつなるさき渡
越へてうちはしひがしのまろきの五日

我まだたつのまもなくかみそゝそよながく。
わすれぬ身よ世のひ棹(さを)さしまつはげの(?)
つゆのしらくてぎきるまり花のすがたの
そのまゝ又て新乃きてあれるまいやんも
秋をまつのもさえさして。鏡みず袂(たもと)をぬらして。
なにざきまゝなりけるくものまゝのをもわび
しぬ蓬(よもぎ)のうちに袖をなかのくもなるよ
しれまでば枕さうへて。まるまてあつつて。
一夜の夢のうつゝもあらし。犬将(ざう)に一期(ご)
まはれぬおもひくにけりのれしゆるにこし也
とつや

○世に伏見翁(ふしみのおきな)といふ。三とせがあひだたゞふし居て
ざれごとものいはず常(つね)に。大和國(やまとのくに)菅原(すがはら)のかしこ
なる岡にふしゐたるゆへなり。その所を伏見里
といひて。今に和歌(わか)にも。菅原や伏見の里ぞあれ
皇乃御抗(さしまくゆめ)も くまれ人あつくしんと
よみし和歌や。伏見の字もやがてやまの
そうけんの

御香宮(ごかうのみや)

○此宮は神功皇后(じんぐうくわうごう)の廟(べう)なり。そのかみ社頭乳れ
神木

木幡

○此所ハ伏見乃東。宇治かよひぢなり。萬葉集に柿本人丸哥に。山城のこはたの里に馬ハあれどかちより君をおもへハかちよりぞ来りとよめり

小栗栖

○此所ハ伏見の東なり。醍醐の道すがらなりと云伝りき

釈常暁ハ。山州小栗栖の路すがら棄子なりとかや。ひろハれて。元興寺の豊安をまもりて兼和尚家学

渡唐し。淮南の廣陵館にいたりて。栖霊寺の文璨といふ人に。密教をうけ。又花林寺の三論講誦元照といふ人に謁して。よく密奥を極め。阿闍梨位にして。大元帥の秘法をさづかりて。申請し侍りて。帰国小栗栖の法琳寺にて元帥の法を修行しぞ。又新勅乃為に天下大に旱魃しける時。常暁勅をうけて。神泉苑にをいて此元帥法を修しけるに。白龍池上にあらハれ。そのまゝに。甘雨くだりけるとかや。貞観七年十一月晦日に。逝去しけるとぞ

昔時兼好法師がもとへ来りしに。さらぬ
んなりさまなり。俺たりし筆乃うくても
ほりきしけるまなび。わきまへに見めぐりしに
庭めり樹木の木なんどびしくかりひかう
なみてく。此木なのり御しかりど心をもし。識
にさるとしかくなりぬ。つらせつけり人の庭
めりなり。牡丹常ようりと花もくさまね待まし
しに。いづれ也へおきまや。庭花おりつきなれば
余はまきぞまてかくるのへまんうしありの世
ら遁ぬ世のもわきまへ。西鶴が見し後徳
大寺大臣乃寝殿まひのれぞら縄も綾小
路宮の御んたのしんやかなしければ。こゝを出て
いづのしくておのしふと同じ作るお必し毎
くくれさゝりて。宴をんもかゞくまし色
なぐうまつしのしめぐらへしぬ。たち出このげふ
をかく見ふらん

櫺河橋

○此所は。ふしみうりうぢんへわり道とく
後醍醐天皇のまゝやで出まく伏見へ住ひゆたの
まつりまうえいつのれそし